ハーレムパンデモニウム
HAREM PANDEMONIUM
小説 竹内けん
挿絵 黒澤清崇
立ち読み版

登場人物紹介

ユーマ

ドモス王国の騎士、巡検使としてこの地にやってきた。
真面目にコツコツと平凡な人生を歩みたい。

エレナジェーン

マージェニックの後妻で、彼亡き城を預かる代理当主。
男のいない屋敷で熟れた身体を持て余している魔性の女。
ユーマにある取引を持ちかけてくる……。

ヒルデガルド

苛烈な性格で家を守ることに必死な七支刀を使う次期当主。
美女ではあるがこれまで縁談を何度も破談にしている。

ハーレムパンデモニウム
HAREM PANDEMONIUM

メルセデス

ヒルデガルドの姉で儚げで口数は少なく、危険な香りがする。
父親に言われるまま三度結婚するがすべての夫を暗殺された過去がある。

ハンナ

屋敷で働くメイド。地元の農家出身、元気で真面目。
悪魔の屋敷に似合わない春風のような女の子。

第一章　魔境　009
第二章　禁忌　049
第三章　妖女　083
第四章　悪女　116
第五章　魔姫　151
第六章　淫獄　198

「ごめんなさい。わたくしのせいで」
たしかにヒルデガルドになかなか婿が決まらないのは、姉メルセデスの所業があまりにも有名だからであろう。
「いや、姉上のせいというわけではなく……」
さながら女悪魔のような装いをしたヒルデガルドだが、いまにも消えてなくなりそうな姉を前に慌てる。
「ふぅ」
エレナジェーンは興が冷めたといった顔で溜息をつくと、酒を呷る。
（なかなか業が深い一家だ）
どんな美食も、雰囲気が悪くては味が半減するというものだ。
ユーマは場を和ませようと、必死に努力をした。

※

「御用がないようでしたら、今夜はこれで下がらせていただきます」
エレナジェーン、メルセデス、ヒルデガルドといういずれ劣らぬ美女美少女との、格式高く、息の詰まるような晩餐会を終えて、ユーマは与えられた部屋に帰った。
風呂にも入って、用意された寝巻に着替える。
洗濯物は侍女のハンナが持っていく。

「ああ、ありがとう」
「お休みなさいませ」
丁寧に頭を下げたハンナが退出し、屋敷が静まりかえったのを見計らってユーマはそっと部屋を抜け出した。
「まぁ、与えられた仕事はきっちりやらないとな。叔母上にどやされるのも面白くない」
ユーマは城内の探索を開始する。
深夜、使用人たちも寝静まった城内は、なんとも不気味だ。
「こういう古い城には、たいてい隠し通路とかあるものなんだよな」
昼間のうちに目星はつけておいた。書斎に入り、本棚を漁る。
「屋敷の構造を考えるに、ここらあたりに入口があると思うんだがな……よし、ビンゴ」
巨大な本棚がスライドして、抜け穴が姿を現す。
「さて、鬼が出るか、蛇が出るか」
隠してあるということは何かしら疚（やま）しいものがあるということだ。脱税の証拠かもしれないし、白骨死体の山がでてくるかもしれない。あるいは、謀叛のための武器を隠している可能性だってある。
職業意識に背を押されたユーマは、躊躇わずに足を踏み入れた。
狭い道だ。とはいえ、人が通るには十分なスペースがある。

ところどころ覗き穴のようなものがあったので、覗いてみる。すると、部屋の中を見ることができた。

「これはやっぱり、先の領主様が城内のものたちを観察するために作った仕組みだろうな」

晩年のマージェニックは極度の人間不信であったろうことはさまざまな資料からみて間違いない。自分の使用人たちも信用できずに、このような仕掛けで監視していたのだろう。

（ここは女の子の部屋かな）

たいして広い部屋ではない。寝台だけがあり、寝るためだけの部屋といったところだろう。

調度品からみて、領主一家の部屋ではないだろう。

寝台の上には黒髪の少女が座っていた。

（あれは、ハンナか）

身の回りの世話をしてくれた侍女だ。

まだ着替えていないようで、メイド服のまま胸元に何か布を抱えていた。それに顔を突っ込んで、スーハースーハーと深呼吸をしている。

（いったいなにをしているんだ？）

女の子の寝室を覗き見するのは、礼儀に反すると頭ではわかっているのだが、好奇心を抑えられずに、注視してしまう。

（あの布、……もしかして、俺が着ていたワイシャツか？）
自分の荷物である。見間違えようがない。
「持ってきてしまった。ユーマ様のワイシャツ。これが男の、ユーマ様の匂い……。ああ、お風呂のとき、お背中を流しにいったほうがよろしかったかしら……でも、そんなはしたないこと……できない。でも……」
なにやらブツブツ呟いている声まで聞こえてくる。
（盗聴機能まで備わっているのか？）
驚くユーマの視界では、さらに驚くべき光景が展開していた。
黒髪の、いかにも大人しい清純派と思われた乙女の左手が、自らの左乳房を握りしめ、右手を股間に下ろしていき、スカートの中に入れてしまったのだ。
「はぁ……、はぁ……、はぁ……」
頬を紅潮させた乙女は、ワイシャツを抱いたまま、うつ伏せになり、尻だけを高く翳した。
ユーマのいる方角からだと、ちょうどお尻から覗く形になってしまい、ミニスカートの中が覗いてしまった。
白いストッキングに、白いガーターベルト、白いショーツに包まれたお尻がよく見える。
その布地の上から、人差し指と中指と薬指が添えられ、激しく擦られていた。

（オナニー……だよな？）
なんともプライベートな場面に出くわしてしまったものである。
ちなみに、女性のオナニーを見たのは初めてではない。
実妹のルキアナが魔道書を借りたいというから、わざわざ部屋まで持っていってやったときに、思いっきりオナっていた現場に出くわしてしまったのだ。
そのときの妹の絶望した表情があまりにも酷かったので、その出来事は見なかったこととして振る舞ってやっている。
妹の場合は、素っ裸で仰向けになり、左手で胸を揉み、右手で陰部を弄りながら、膣孔を指で浅くほじっていたようだが、この少女の場合は、陰部に直接触れるのではなく、布地越しに刺激しているというのが、なんとも初々しい。
若いゆえに直接触れると刺激が強すぎるのだろう。あるいは、処女ゆえの、直接触れることへの罪悪感か。
（あらあら、あのお嬢さんは、後ろから犯されたい願望でもあるのかな……）
白いショーツのまたぐり部分には、大きな染みができ、中身が透けて見えそうである。
（可愛いな♪）
まさか自らの秘事を覗かれているなどと露ほども知らぬハンナは、しばし指遊びをしていたが、そのうちに手を止めた。

「ひぃ、こんなに激しくされたら、ケモノに……ケダモノになってしまう！」
「獣になってくださいよ。なにも考えずちんぽの奴隷になってください」
「ああん♪　おちんぽ素敵、おちんぽ大好き、おちんぽ、おちんぽ、おちんぽ」
怖いほどに整った美貌を誇る淑女が口にしているとは思えない淫語の連発に、ユーマは幻惑される。
（やっぱりこの人エロい。男を操る術をよく知っている）
策略に乗せられているというのは、頭の片隅でわかっているのに、止まらない。狂ったように腰を叩き込む。
（それにしてもどこもかしこもエロい。おっぱいがエロい、オマ〇コがエロい、顔がエロい、腋の下がエロい。とまらねぇ）
ユーマとしては一方的に女を責めているつもりなのだが、その実、すべては女の思惑通りのような気がして仕方がない。
それを打ち破ろうと、さらに激しく腰を使うのだが、その結果、女はさらに淫らな表情を見せてくれて、男はさらに加速するしかない。そんな悪循環だ。
キュッ！　キュッ！　キュッ！
柔らかな襞肉が、容赦なく男を締め上げてくる。
（これはイキっぱなしの状態に入っているということか？　なんつー締まり方だ。ちんぽ

が溶ける。うっ、もう、ダメだ。また出る）
いくら狂乱したところで、男の耐久力には限度がある。
瑞々(みずみず)しい女体に向かって、再度噴出する。
「はぁん、また、入ってくる。入ってくるのぉぉぉ」
右足を掲げた横位で再び膣内射精をされた、エレナジェーンは背をのけぞらせて狂態を晒す。
「ふぅ～」
エレナジェーンが安堵の溜息をついたところで、ユーマはさらに奮起した。
逸物をぶち込んだままエレナジェーンをうつ伏せにし、後背位にする。
「ま、まだやるの？」
「あたりまえでしょ。夜はまだまだ明けませんよ」
「そんなにやられたら、死んでしまうわ」
わざとらしく怯えた表情を作るエレナジェーンに、ユーマは露悪的に応じる。
「殺してあげますよ。ちんぽで突き殺してあげます」
「ひぃぃぃぃ」
哀れっぽい淑女の悲鳴など無視して、その充実した尻を捕まえたユーマは、三度荒々しく腰を使い始める。

「お、お腹が、えぐれる。えぐれちゃうの♪」
「気分を出しているところ悪いんですけど、ご領主殿、お尻の孔がヒクヒクしていますよ」
「あん、そんなところ見てはダメ」
恥じたエレナジェーンは、自らの肛門を隠そうと、右手を背後に回してきた。
その手首をユーマは掴んでしまう。そして、嘲弄する。
「くすくす、ご領主殿はもしかして、アナルは処女かな？」
「わらわは変態ではないわ」
エレナジェーンは怒ったように応じるが、ユーマはせせら笑う。
「覗かれているのを承知で、覗き穴に向かって、股を開いて、放尿するような女を、世間では変態というんですよ」
「もう、意地悪、ね」
恥じ入るエレナジェーンの両腕を背後に取ったユーマは、背後からガツガツと犯す。
おかげで、釣り下がった巨大な乳房はプルンプルンと揺れる。
淑女の尻の孔がヒクヒクと痙攣しているさまを、見下ろして楽しんだユーマは、さらに今度は自分が仰向けになり、女性上位の対面位になる。
しかし、もはやエレナジェーンに自ら腰を動かす力は残っていなかった。ユーマが下からひたすら突き上げる。

「あん、あん、あん、もうダメ、もうダメ、頭の中、真っ白。凄い、凄すぎるの～」
もはや理性は崩壊したらしく、エレナジェーンはただの牝の獣となって喘いでいた。
頬を染め、全身から汗を垂れ流す、さながら男に操られる人形のようだ。
（これはまたいい表情だ）
普段は隙なく化粧をして、怖いほどに整った美貌を誇る貴婦人が、いまや白目を剥いている。大きく口を開いて、舌を出し、涎を噴きながら喘いでいた。
俗に言う「アヘ顔」になってしまっている。
普段の怖いほどに決まった美貌を知っているだけに、ギャップから男を夢中にさせる。
（うわ、とまらねぇ。この身体なら、ほんと、一晩中犯していても飽きないな）
噛めば噛むほど味が出る、という言葉があるが、犯せば犯すほどに味が出る女である。
ユーマはとにかく知っているテクニックを総動員して、さまざまな体位でエレナジェーンを犯した。
そうこうしているうちに、ユーマは三度、耐え難い射精欲求に捕らわれた。
「それじゃまたいきますよ」
抜かず三発目が来ようということを察したエレナジェーンは、怯えたように首を横に振る。
「ひぃ、も、もうダメ、お腹いっぱいよ。これ以上されたら、お腹が破裂しちゃうわ」

「いきます」
ユーマは情け容赦なく、欲望の赴くままに射精した。
「ひぃ、ひぃぃぃぃぃぃ」
男と女は一対の生き物だ、体内射精をされると女もまた昇り詰める。
エレナジェーンは艶やかに反り返った。
白い二つの乳房が跳ね上がり、先端の赤い乳首から汗が飛ぶ。
ドビュビュビュビュ！
「もう、らめぇぇぇッッッ!!!」
次の瞬間、男女の結合部から一筋の噴水が上がった。
プシュー！　ジョ――――!!
温水があたりに撒き散らされる。
酒が入っていたからだろうか、抜かず三発を決められたエレナジェーンは豪快に失禁してしまった。
「あらあら、セックスの最中に失禁だなんて、だらしないですね。淑女の行いではありませんよ」
「ご、ごめんなさい」
妖艶なる淑女は、媚びるように男の胸に頬を添える。その実、体内に飲みこんでいる逸

物を抜こうとはしない。
（これはつまり、男が堅くなるのを待っているということですか？）
ユーマは背筋に一筋の冷たい汗が流れるのを感じた。
さながら底なし沼にでも嵌ってしまったかのような気分だ。どんなに精液を飲みこんでも、決して満足することのない女悪魔。
ピクッ！
女の体内で逸物が力を戻してきた。ただちにエレナジェーンの瞳に光が戻る。
「うふふ、まだいたしますの？」
「そ、それは……」
連続三発をしてユーマは、満足した。しかし、ここでやめることは、男として敗北したような気分である。
ユーマは勇を鼓して宣言した。
「まだまだこれからですよ」
「あぁ……わらわはか弱い女。おちんぽには逆らえませんわ」
口ではユーマの絶倫ぶりに、困惑している、という風を装いながら、その実、下半身では逸物をしっかりと飲みこんだまま、決して放そうとはしない。
（こういうのを妖女というのか）

毒がある、とわかっていても、美味いからやめられなかった。それはさながら河豚（ふぐ）を食べる感覚に近いかもしれない。

とにかくユーマは止まれなかった。完璧な女体美と男を操る仕草を弄する悪女に搦め捕られ、ひたすらに休みなく空が白むまで、激しく腰を使い続けた。

男を虜にする色気という意味では、エレナジェーンやメルセデスといった成人女性たちに及ばない。しかし、若く健康的な肉体は、否応なく牡を引きよせる。

焦らしていたつもりが、ユーマのほうが落ちた。

「ヒルデガルド様のオマ〇コを舐めさせてください」

後ろ手に縛られて、首輪を付けられているユーマは、床に額を付けるように土下座した。

そのさまにヒルデガルドはいたく満足する。

「うふふ、ドスケベな犬だ。いいだろう」

許可をいただいたユーマはありがたく、ヒルデガルドの股先に顔を近づけて正座をした。

クリトリスは完全な包茎だが、肉船底の先端でぷっくりと膨らんでおり、逆に肉船底の船尾からは溢れた蜜が、肛門にまで滴っていく。

しかし、いきなり舐めることはせず、恐る恐る提案した。

「あの～オマ〇コをもっと広げてくれませんか？」

「なんであたしがおまえの命令を聞かねばならぬ」

「俺はほら、これだから」

ユーマは後ろ手に縛られた両腕をアピールする。

「仕方ないな。ほら、これでいいのか？」

自分でしでかしたことである。主導権を決して手放したくないヒルデガルドは、犬の提

案を聞きいれて、自らの人差し指と中指で、陰唇をくぱっと開いた。
以前、彼女がトイレで放尿しているところを、ユーマは覗いてしまったことがある。
そのため二度目の対面だ。
(相変わらず、悪女スタイルとは不似合いな、綺麗なオマ〇コだこと)
ピンク色に濡れ輝くさまは、実に美味しそうで、男の食欲を刺激する。
「もう少し奥まで」
「こ、こうか？」
毒を食らわば皿まで、よく意味がわかっていないらしいヒルデガルドは、犬男の言うがままに、膣孔まで開いて見せた。
(うわ、処女膜まで丸見え)
膣孔の奥を白い膜のようなものが塞いでいた。とはいえ、完全に塞がっているわけではない。どんな処女膜でも、月経を通すために多少の裂け目はあるものだ。
ヒルデガルドの処女膜は、半月型の孔が空いていた。
そこから漂う処女臭もなかなか強烈で、鼻から吸った牡犬を猛らせる。
「舐めさせていただきます」
本能に従ったユーマは乙女の花園に、頭から突っ込んだ。
会陰部から船底、膣孔、尿道口を通って、淫核まで、ゆっくりと舐め上げた。

「はぅ」
ビクンとヒルデガルドの身体が震える。
初めてのクンニの衝撃に驚いたようだ。それから自分の動揺ぶりを男に見抜かれていると知って、慌てて余裕の態度を取る。
「ふん、なかなか上手いじゃないか。義母上や姉上が夢中になるだけはある。オマ〇コを舐めるのだけは得意というわけか」
「どういたしまして」
無意味に髪など払いのけているヒルデガルドの粘膜を、ユーマの舌先がゆっくりと隅々まで舐めまわしていく。
ペロリ、ペロリ、ペロリ……。
「お、男とはつくづく浅ましいな。そこはおしっこをするところだぞ。そこをそのように嬉しそうに舐めるなど気が知れぬ。はぁ、ああ、あん……」
ヒルデガルドは必死に傲慢な悪女を演じようとしているようだが、肉体的な快感の前にはそれも難しいらしい。
いつしか足も下ろして、M字開脚になったヒルデガルドは、寛いだ姿勢になってしまう。
それだけではなく、いつしか両手でインナー越しに、乳房を揉み始める。
インナーを左右に開き、乳首を引っ張り出すと、それを指先で抓んでシコシコと弄ぶ。

なかなか手慣れた仕草だ。
（あ、こいつ、さっき女はオナニーなんてしない、なんて言っていたくせに、やり込んでやがるな）
そんなユーマの視線の意味を察したのか、ヒルデガルドはいささかばつが悪そうに口を開く。
「なにその眼。おっぱいも触りたいってわけ？」
「……ああ」
「ダメだ。貴様なんかに触らせるのはもったいない」
そう嘯いたヒルデガルドは、挑発的な表情を作りながら、ユーマに見せつけるように自らの乳房を大きく揉む。
単に大きいだけではなく、ムチッとした姿には中身までミッチリと実が詰まっていると思わせる弾力がある。思わず「若いって素晴らしい」と絶賛したくなるような我儘おっぱいだ。
「……」
陰唇を舐めながら、ユーマは幻惑される。
男に陰唇を舐めさせながら、自らは乳房を揉んでいたヒルデガルドは、不意に自らの右の乳房を持ち上げると、顔を下げて、赤い舌を伸ばした。

ペロリ、ペロリ、ペロリ……。
なんと赤い舌が、赤い乳首を舐めている。
(あ、こいつ、自分のおっぱい、自分で舐められるんだ)
俗に「マイパイ舐め」といわれる、巨乳女にしか許されない荒技だ。
「なに物欲しそうな顔をしている。貴様になど、あたしのおっぱいは触らせないぞ。貴様はそこで、あたしのオマ〇コだけ舐めていろ」
男に陰唇を舐めさせながら、ヒルデガルドは挑発的な表情で、自らの乳房を持ち上げて、左右の乳首を交互に舐める。
女はオナニーなんてしない、と嘯いていたが、この様子を見ると、かなり重度のオナニーマニアであることが察せられた。
(あくまでも主導権を握っているのは自分だ、と言いたいわけだな)
クンニされる気持ちよさに溺れながらも、それを素直に認めるのが癪に障っての、余裕を演出するパフォーマンスだろう。
(男を舐め腐った小娘には、お灸を据えてやりたくなるよな)
ユーマは反撃のタイミングを計りながら、舌を動かす。
「はぅ、はぅ、はぅ……」
いかに悪女な装いを好み、外見的にはど淫乱に見えても、その実、十代の小娘。しかも

処女。
大人の男から見れば、隙だらけだ。
(あらあら、気持ちよさそうな顔しちゃってまぁ)
パフォーマンスとして、マイパイ舐めをして見せていたヒルデガルドだが、いつしかそんな余裕もなくなったのだろう。たた男のクンニを受け入れて、ぽぉ〜っとしている。
トロンとした青い目はイってしまい、口元は半開き、口角からは涎が垂れている。
(そろそろいいな)
頃合いを見計らってユーマは、包茎クリトリスに吸い付き、剥いてやる。
「うほっ」
剥きだしの陰核を吸い上げられたヒルデガルドは、天井を仰ぎ、のけぞった。
そして、慌てて悲鳴を上げる。
「そ、そこはダメ、刺激が強すぎる。そんな、そこを吸われたら、あたし、あたし……」
クリトリスの包皮を剥かれると同時に、小娘の化けの皮が剥がれたといったところだろう。
少女の急所を口腔に捕えたユーマは放さず、それどころか、舌先で転がしてやる。
いきなりこれをやったら、ヒルデガルドは痛みしか感じなかったであろう。しかし、十分に高まったところで行われた生淫核責めは、強烈な快感となって、その身を駆け抜けた

ようだ。
「ああ！　ああん！　ああ！　いい！　いいの！　気持ちいい！　気持ちいい！　気持ちいい！」
理性を投げ捨てたヒルデガルドは、ただ襲いくる牝としての快感に翻弄されて、ビックンビックンと健康的な肢体を痙攣させる。
俗にいうイキっぱなしの状態に入ったということだろう。
生意気な小娘を性的に翻弄することに、悦を覚えたユーマは、さらに舌先で淫核を弾きまわしてやる。
若く健康な肢体というのは、同時に快感も大きいのだ。
「もう、らめぇぇぇぇぇ!!!」
情けない悲鳴とともに、小生意気だった小娘は、大口を開け、涎を噴きながら思いっきり絶叫する。
ビクン！　ビクン！　ビクン！
下腹部が激しく痙攣し、大量の恥蜜を撒き散らす。
(あ、絶頂しているな)
実にわかり易い。ユーマはいったん、陰唇から口を離す。
「はぁ……、はぁ……、はぁ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

ドキドキラブラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

※二次元ドリームノベルズは18歳未満の方は購入できません

二次元ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

サイズ:文庫

リアルドリーム文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!